

石見銀山遺跡発掘調査概要 6

1 9 9 3 . 3

島根県大田市教育委員会

序

島根県のほぼ中央、大田市大森町には戦国時代から江戸時代を通じて開発された石見銀山遺跡があります。石見銀山は戦国時代には戦国大名の尼子氏や毛利氏によって争奪戦がおこなわれ、江戸時代にはいると幕府の直轄領、天領として支配され、盛んに銀が掘り出されました。また石見銀山から多量に産出された銀は、戦国時代にはヨーロッパ人たちによってアジアやヨーロッパにもたらされ、世界経済にも影響を与えたといわれています。石見銀山に関連する文化財として、史跡や建造物、美術工芸品など様々なものが大森町にのこされています。大田市教育委員会ではこれらの貴重な文化遺産を未来に伝えるために、史跡の整備・町並み保存事業などに取り組んでおります。遺跡の発掘調査も将来の整備事業等に備えるために継続して実施していますが、これまで未解明であった銀生産の遺跡も発見され、石見銀山の新しい歴史が浮き彫りにされつつあります。

平成4年度の発掘調査は国指定史跡である山吹城跡の下屋敷地区でおこない、製錬所である吹屋の一部が発見され、新しい資料を提供することとなりました。

本報告書が今後の石見銀山史の解明や関連する整備事業に広く活用されることを祈念するとともに、今回の調査でお世話になった地元大森町をはじめ、関係各位に改めて感謝いたします。

平成5年3月

島根県大田市教育委員会

教育長 大久保 昭夫

例 言

1. 本書は平成4年度の国庫補助事業として島根県大田市教育委員会が実施した、石見銀山遺跡発掘調査の報告書である。
2. 調査体制は下記のとおりである。

島根県大田市教育委員会	教 育 長	大久保昭夫	
	文化振興室	渡 吉正	清水新二郎
		林 泰州	遠藤 浩巳（担当者）
		井野 裕子	斉藤 住江
		小谷留理子	

調査指導 田中 圭一（筑波大学歴史人類学系教授）
萩原 三雄（帝京大学山梨文化財研究所研究部長）
葉賀七三男（資源素材学会理事）
小菅 徹也（新潟県立佐渡高等学校教諭）
村上 勇（広島県立美術館主任学芸員）
松村 恵司（文化庁記念物課文化財調査官）
熱田 貴保（島根県教育委員会文化課主事）

3. 収録した地図・実測図は大田市教育委員会が作成したものを主とし、一部については関係機関作成のものを利用した。
4. 出土遺物及び作製した図面・写真は、大田市教育委員会にて保管している。
5. 実測図等に示した方位はいずれも磁北である。
6. 本書の執筆・編集は上記の遠藤がこれをおこない、関係各位の協力を得た。また山吹城跡の縄張については、山陰城郭研究会々員寺井毅氏よりご寄稿いただいた。記して謝意を表す次第である。

目 次

I 調査の概要・経過	1
II 石見銀山遺跡の概要	4
III 調査の概要	9
IV 小 結	20
付 石見銀山遺跡山吹城の縄張について	24

挿 図・表 目 次

図1 石見銀山遺跡位置図 (1/25,000)	2
図2 山吹城跡下屋敷地区現況およびトレンチ設定図 (1/900)	3
図3 山吹城字限図 (国史跡指定地、1/6,000)	10
図4 第1トレンチ東壁土層実測図 (1/60)	11
図5 第2トレンチ遺構・土層実測図 (1/60)	12
図6 第2トレンチ出土陶磁器実測図 (1/3)	13
図7 第3トレンチ遺構・土層実測図 (1/60)	14
図8 第3トレンチ出土陶磁器実測図 (1/3)	14
図9 第4トレンチ北壁土層実測図 (1/60)	15
図10 第5トレンチ遺構・土層実測図 (1/60)	15
図11 第5トレンチ吹床跡・土壌実測図 (1/30)	16
図12 第5トレンチ出土遺物実測図 (1/3)	17
図13 第5トレンチ金属製品実測図 (1/3)	18
図14 第6トレンチ北壁土層実測図 (1/60)	19
表1 石見銀山遺跡の調査の概要	7~8
表2 山吹城の地名一覧表	10

I 調査の概要・経過

石見銀山遺跡は昭和44年に山吹城跡や坑道跡7ヶ所などの計14ヶ所が史跡指定を受けて以来、代官所跡と坑道跡である間歩を中心に整備や活用が進められてきた。昭和58年から島根県教育委員会による石見銀山遺跡総合整備計画策定事業が4年計画で開始され、遺跡整備の基本構想、基本計画の策定をめざし調査と検討がおこなわれた。

埋蔵文化財としての石見銀山遺跡は、これまでに指定された山吹城跡や間歩についてはおおまかな様相や写真などによる整備がなされてきたが、近年歴史考古学の分野で中・近世遺跡の調査・整備の事例が各地で増えるとともに、全国的にも稀少な鉱山遺跡ということで石見銀山遺跡の保護と活用が再認識されるようになった。大田市教育委員会は遺跡の保護と活用のために主要箇所での発掘調査を昭和58年度、昭和63年度以降実施しており今年度で6年目を迎えることになった。これは一方で関連整備事業や開発事業の事前調査がここ数年増加する傾向にあることにもよる。

平成4年度は、国指定史跡山吹城跡地内の下屋敷地区内で計6ヶ所のトレンチを設定し、遺構の遺存状況の確認を主眼とし調査をおこなった。山吹城跡・下屋敷地区は戦国時代におかれた「休役所」と「焰硝蔵」の巨大な石垣が存在し、地名として「下屋敷」「千京」「大満寺」などがあり戦国時代の城下町を予想させるところである。また江戸時代にはいると「休役所」は初代奉行大久保長安により引き続き奉行所として使われたが、大久保長安の支配によりこの辺り一体は大規模な改変・整備がおこなわれたと考えられる場所でもある。このような歴史的背景をもつ地域であることや、昭和18年の大水害によりこの下屋敷地区一帯は大規模な土石流が発生したといわれ、土石流堆積の下層の遺構の遺存状況の確認をすることが以前から必要とされていた。

調査は平成5年1月から3月までのうち約1ヶ月半を要し、計6ヶ所のトレンチ調査を実施した。調査の結果、それぞれのトレンチで遺構や遺物について興味深い資料が得られ、今後のこの地区の調査や、整備事業の導入の際には有効な成果といえるものであった。

最後になるが、今回の調査を通じて地元大森町をはじめ多くの方々からご指導、ご協力をいただいた。改めて謝意を表したい。



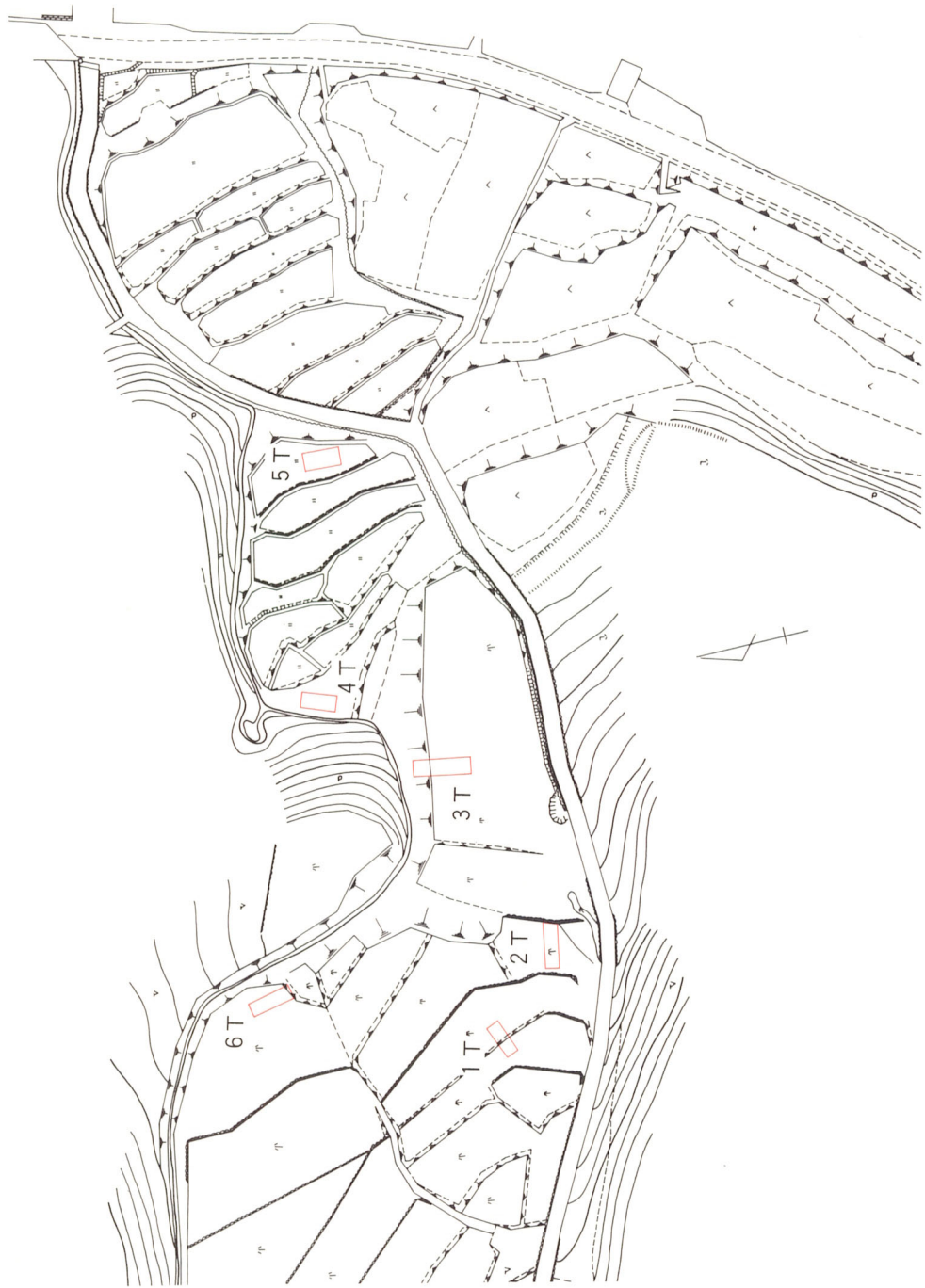


図2 山吹城跡下屋敷地区現況およびトレンチ設定図(1/900)

II 石見銀山遺跡の概要

1. 石見銀山史について

石見銀山は鎌倉時代末期の延慶2年(1309)に発見され、本格的な開発は大永6年(1526)に博多の商人神屋寿貞と出雲鷺浦の銅山師三島清右衛門が入山、天文2年(1533)寿貞が博多から慶寿と宗丹を連れて来て「灰吹法」と呼ばれる銀精錬法を現地に導入、それ以降産銀量は著しく増大したと『銀山旧記』は伝えている。灰吹法は石見から各地の鉱山に伝えられたことで日本は世界の中でも有数の産銀国となり、またこれまでの銀の輸入国から輸出国へ転換するという対外貿易史上の画期をもたらした新しい技術であった。当時環日本海域でおこなわれていた日朝貿易・日明貿易において日本から半島・大陸へは主に銀が輸出され、生糸・絹織物・鉛が輸入された。東南アジアの香辛料を求めたポルトガルはこの貿易に目をつけ、中国の生糸・絹織物などを搭載して日本に來航し、銀を手に入れ東南アジアの香辛料を持ち帰る中継貿易をおこなった。日本で産出された銀は東南アジアの国々に流れ、政治・経済に大きな影響を与えたわけだが、この時の銀の大部分が石見銀山産であったと推測されている。

石見銀山は戦国期に至り大内・小笠原・尼子・毛利などの戦国大名によって山吹城を拠点にした争奪戦が繰り広げられる。周防の大内氏が最初に銀山を治め、たくさんの掘り子大工を連れて入山し採掘を始めたといわれる。その後享禄4年(1531)に邑智郡川本温湯城主小笠原氏が掌握、3年後には再び大内氏が奪い返し、その後出雲の尼子氏・安芸の毛利氏が争奪戦に加わり永禄5年(1562)に毛利氏が完全掌握するまで35年余り続いていく。天正15年(1585)に、石見銀山は中央で天下統一をすすめる豊臣秀吉と毛利氏の共同管理に移行し、秀吉は文禄2年(1593)の朝鮮出兵時には、多量の石見銀で文禄丁銀を造り戦費に充てたといわれる。

慶長5年(1600)関ヶ原の戦いで徳川方が勝利をおさめると、家康は石見銀山に上使を派遣して翌6年から大久保長安を銀山の管理奉行とし、周辺の144ヶ村、約4万8千石を石見銀山御料として直轄料とした。初代奉行の大久保長安は鉱山経営に新しい技術を導入するとともに、御料内の検地などを実施した。この頃備中国から来ていた安原伝兵衛という山師が釜屋間歩の鉱脈を発見し、おびただしい銀を採掘し貢銀3,000貫を家康に運上し、辻ヶ花染丁字文胴服一領と扇一柄を拝領している。

石見銀山の最盛期は戦国時代末から江戸時代の初期といわれ、『銀山旧記』には「慶長

の頃より寛永年中大盛、土稼の人数二十万人、一日米穀を費やすこと千五百石余」とか「家数貳万六千軒余、寺百ヶ寺程も有之」と記されている。全体に誇張されているが人口4万人前後はあり、産銀量も年間8,000貫から10,000貫はあったと推定されている。これ以後、坑道が深くなり湧水処理に経費がかかるようになると産銀量は著しく減少し、延宝年間（1673～1680）に入ると奉行も代官に代わり、産銀量年間約400貫に減り、幕末の安政6年（1859）には30貫となった。

江戸時代265年間には奉行・代官・預りが59人も入れ替わり、石見銀山御料約150ヶ村4万8千石の統治と銀山の管理を行った。その中でも初代奉行大久保長安と享保17年（1732）の飢饉を救った19代目の井戸平左衛門は有名である。慶応2年（1866）に戊辰戦争が起き長州軍は石見へ進撃し、益田の七尾城、浜田城を落として銀山御料内へ侵入、代官鍋田三郎右衛門は備後国の上下の陣屋に逃亡した。これより長州藩が旧銀山御料の管理と統治の任にあたった。明治政府が誕生すると、明治2年8月から約半年間大森県が置かれ、翌3年から浜田県と改められ、同9年には隠岐・松江・浜田を合わせて現在の島根県がつけられた。幕末から明治期の産銀量は慶応2年（1866）には年産20貫まで減り、明治期になり大森の有志が一鉱区を掘ったが思わしくなく、明治5年の浜田沖地震では銀坑道のほとんどが崩壊した。明治20年になって大阪の藤田組の経営となり、その後同和工業（株）に受け継がれ、明治25年～29年頃までは、一時的に産銀量が年平均540貫と増加した。大正6年の銀山（仁摩町の永久坑）の従業員は約700人いたが、坑道の地下水が多量に湧き出たため採算が合わず、大正12年3月に閉山されることになった。

2. 石見銀山に関連する遺跡について

石見銀山遺跡は大田市大森町を中心に周辺の仁摩町・温泉津町・邑智町などを含めた広範囲に遺跡が分布し、その中心となる大森町では約100ヶ所の遺跡が存在する。

(1) 城館遺跡

戦国時代石見銀山を巡る争奪の拠点となった山吹城跡とその周辺に城館遺跡がある。険阻な要害山に築かれた山吹城跡は頂上部に階段状に郭を配し、主郭の南には大規模な空堀、南斜面には計19本の堅堀、北側の郭には一部石垣が見られる。山麓の大手には「下屋敷」「御文庫」などの地名が残り、長大な石垣が見られる。この大手には武家屋敷、大手の南には「魚店」「京店」「上市場」などの地名が残り、城下町が形成されていたと考えられて

いる。他の城郭としては、仙ノ山城郭群・矢滝城などがある。

(2) 銀山支配関連遺跡

銀山支配の遺跡として代官所跡・番所跡などがある。代官所跡は南北に細長い谷間に形成された大森の町並みの北側に位置し、表門と門長屋が現存している。代官所の東側には中間長屋跡・向陣屋跡・御銀蔵跡・馬場跡などがあり、代官所周辺には行政関係の機関・役宅が置かれていた。銀山はその周囲に柵列を巡らし「山内」として閉鎖され、独立した社会を形成していた。九つの番所が入口に置かれ、人や物資の出入りが管理されていた。遺跡としては蔵泉寺口番所跡・坂根口番所跡が知られる。また、個々の坑道の入口には四ツ留役所が置かれていた。

(3) 銀生産遺跡

坑道跡・吹屋（精練所）跡・集落跡などがある。史跡指定された間歩としては大久保間歩・龍源寺間歩など7坑道があるが、文政6年（1823）の間歩改めでは休止坑を含め279坑を数えている。間歩のほかに縦坑や露天掘り跡も多く見られる。銀精練をおこなった吹屋跡として栃畑谷吹屋跡・山神奥吹屋跡がある。鉦山集落の大規模なものとして石銀集落跡・栃畑谷集落跡がある。

(4) 信仰遺跡

現在知られている信仰遺跡としては墓地・供養塔などの石造物と寺院跡・神社がある。石造物のうち宝篋印塔・無縫塔などの墓地は戦国期から近世までのものが多数残されている。寺院跡はこれまでの調査で33ヶ所の寺跡が確認されている。神社としては式内社の城上神社、毛利元就を祀る豊栄神社、銀山の守護神としての佐毘売山神社などがある。

(5) その他の遺跡

大森の町並みのなかには町年寄遺宅・郷宿遺宅・地役人遺宅・同心遺宅などの建物跡が残る。また、町の大半が消失した寛政12年（1800）の大火以前の町並みの遺構についても遺存している可能性がある。

3. 石見銀山遺跡の調査の概要

昭和59年度から実施している石見銀山遺跡発掘調査は、遺構の遺存状況を確認し保存整備の資料を得ることを主眼とした調査であり、調査面積が限られたため遺構の全体が検出され、その内容や性格について十分に明らかにされたものは少ない。しかし部分的ながら遺構が良好な状態で検出され、更に出土遺物についても戦国時代から近世・近代のものも含め陶磁器を中心に多量に出土しており、その内容も日常雑器から精錬に使用された「るつぼ」など鉱山遺跡特有なものもみられる。これまでの調査の概要を以下一覧表にまとめてみたい。

調査年度	遺跡名・調査地	調査の概要（遺構・遺物）
昭和59年	代官所跡	切石の石列、自然石の石列、肥前陶磁、地元産陶器…天保年間作成の代官所絵図によれば調査地は米蔵・糶蔵にあたる。砂目積の唐津皿あり。
	蔵泉寺口番所跡 地区	整地面、瓦、陶磁器、鉄砲玉、曲物…遺物は各層から出土、陶磁器の年代は16～17Cが中心。
昭和63年	龍源寺間歩 四ツ留役所	〈I区〉礎石、石組施設、溜樹、肥前陶磁、信楽焼、銭貨、キセル…江戸期の四ツ留役所、明治期の藤田組事務所の関連施設。〈II区〉石列、岩盤に掘られた溜樹・溝・ピット・試掘坑、肥前陶磁、備前焼、石見焼、銭貨、キセル、要石、灯籠、石臼…江戸期・明治期の建物跡。岩盤に掘られた遺構は採鉱関連施設か。
平成元年	蔵泉寺口番所跡	石列（東西方向と南北方向）、中国磁器、肥前陶磁、信楽焼、銭貨、鉄砲玉…山内を囲った柵列の基底部か。
	上市場地区	建物跡（礎石、井戸、排水溝）、瓦質摺鉢、カワラケ（るつぼ）、中国磁器、肥前陶磁、備前焼、信楽焼、銭貨、砥石、要石、鉄製品…戦国期から江戸期にかけての銀山の町。
	向陣屋敷	陶磁器、瓦片…本瓦葺きの軒唐草、のし瓦。
平成2年	蔵泉寺口番所跡	整地面、中国磁器、肥前陶磁、備前焼、石見焼、カワラケ、銭貨、硯…口番所に関連する整地面。

	大龍寺谷地区	〈I区〉整地面、溝状遺構、ピット、中国磁器、肥前陶磁、備前焼、信楽焼、瀬戸美濃系、カワラケ、石見焼…竜泉窯系の青磁香炉あり〈II区〉建物跡（柱穴・要石）、中国磁器、肥前陶磁、備前焼、鉄製品（鑿）…鉦夫の住宅跡か。
	旧河島家敷地内	井戸跡、石組の炉状遺構、石列、中国磁器、肥前陶磁、備前焼、志野焼、カワラケ、鉄製品（釘）、銭貨…寛政12年（1800）以前の建物跡。出土した陶磁器からこれらの遺構の年代は17C初頭まで遡る可能性あり。
平成3年	下河原下組地区	吹屋跡（礎石・側溝・排水溝・炉跡・作業台・要石）、石組溜樹、建物跡、中国磁器、肥前陶磁、織部焼、備前焼、鉄製品、キセル、銭貨…17C前半の吹屋（製錬所）跡。

表1 石見銀山道跡の調査の概要

このように概観すると、遺構はそれぞれの調査地で各時代の遺構面が比較的良好な状態で重複しながら遺存していることがわかる。また共通して指摘されるのが整地層の問題で、ガラ・ズリ（坑道を掘る時に出る礫、鉦石の不要な部分）やカラミ（精錬の際に排出される鉦滓）をかなり含んでおり、包含する陶磁器が16世紀後半以降の中国磁器、16世紀末から17世紀初頭の唐津・唐津系陶器が多いということである。これは銀山の開発や整地された時期を考える上で指標となる。

出土している陶磁器の組成は、16世紀第3四半期から17世紀前半は中国磁器、唐津・唐津系陶器が中心で、備前・信楽なども含まれる。調査地によっては志野・織部なども出土しているが、瀬戸美濃系はほとんど含まれない。17世紀後半以降は肥前磁器の割合が増え、18世紀以降は肥前磁器を中心に近隣の陶磁器（石見焼等）がはいる傾向にある。

石見銀山遺跡の調査の場合、鉦山都市としての多面的な性格を内包しているため、遺構や遺物も多種多様であるが、今後は鉦山の銀生産遺跡の内容が具体的に明らかにされることが望まれる。

Ⅲ 調査の概要

1. 遺跡の位置と環境

国指定史跡山吹城跡は、大田市大森町の南西に位置する要害山に築かれた戦国時代の山城である。要害山は急峻な独立峰で、南を銀山川が北西に流れ銀を産出した仙ノ山と対峙している。築城の経緯については詳らかではないが、『銀山旧記』によれば、鎌倉時代の末期の延慶年間に周防の国主大内弘幸が初めて仙ノ山で銀を採取、その際山吹山に城郭を築きて銀山の守りとしたと伝える。その後、戦国期の銀山争奪戦の中で、山吹城が再び登場することは『陰徳太平記』などの軍記物でよく知られるところである。

銀山争奪戦は大内・小笠原・尼子の間で繰り返されるが、大内氏の後覇権を得た毛利氏と尼子氏が最終的に争い、毛利氏が銀山を完全掌握するのが永禄5年（1526）である。『銀山旧記』は争奪戦の経過について以下のように記している。

- | | |
|------------|--|
| 享禄元（1528） | 大内義興、矢滝の城主を以銀山の押えとす |
| 享禄4（1531） | 小笠原長隆、志谷修理太夫・平田加賀守を以矢滝の城を攻め落す |
| 天文2（1533） | 大内銀山を取り返す、吉田若狭守・飯田石見守が銀山を守護 |
| 天文6（1537） | 雲州の尼子銀山を攻め、吉田・飯田を誅戮す |
| 天文8（1539） | 大内また銀山を攻めて取り返し、正重をもって奉行とす |
| 天文9（1540） | 小笠原蜂起して、大久保肥前守・大谷遠江守に仰せて銀山を騒動す、終に奉行内田正重自害し、銀山また小笠原に属す |
| 天文11（1542） | 小笠原長隆卒す、小笠原兵部太輔長徳山吹の城に入る |
| 天文16（1547） | 8月21日、長徳卒す |
| 天文17（1548） | 小笠原長雄、3月城に入る |
| 永禄4（1561） | 毛利元就銀山を取り、平賀山城守・高畑源四郎を山吹の城に置く
（尼子毛利の攻防の始まり、永禄5年毛利銀山を完全掌握） |
| 元亀2（1571） | 元就卒す、嫡輝元卿続けて銀山を領す |
| 天正年中 | 秀吉公の上使近実若狭守、毛利家より之使三井善兵衛、銀山を奉行 |
| 天正14（1586） | 永田大隅守、銀山御目附として下る |
| 天正15（1587） | 三坂牧源蔵、銀山御目附として下る |
| 天正16（1588） | 増島左門、銀山御目附として下る |

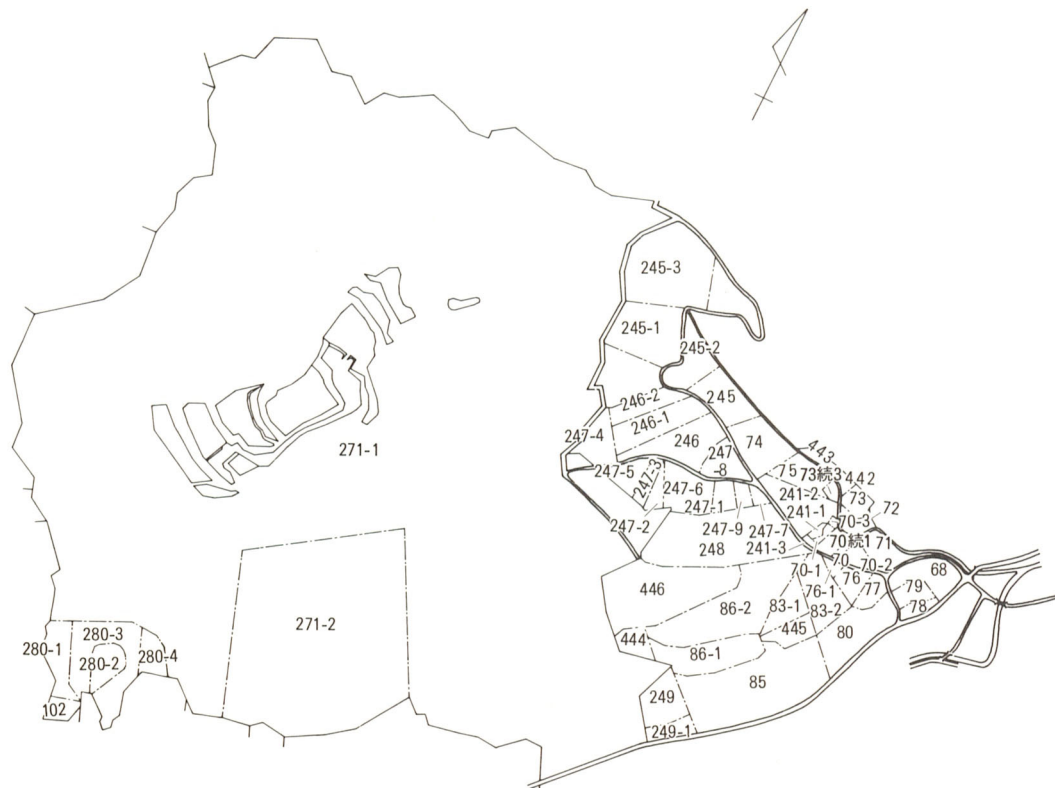


図3 山吹城字限図（国史跡指定地 1/6,000）

番号	所在地	指定地域	番号	所在地	指定地域	番号	所在地	指定地域
1	下モ屋敷	ホ70	5	焰硝蔵先キ	ホ443			ホ444
		ホ70-1	6	焰硝蔵上ミ	ホ271-1	19	千 京	ホ86-1
		ホ70-2	7	古城山	ホ271-2			ホ86-2
		ホ70-3	8	大谷西善地下モ谷	ホ280-1			ホ446
		ホ71			ホ280-2	20	休谷上ミ千京	ホ249
		ホ73続3			ホ280-3			ホ249-1
		ホ74			ホ280-4	21	休谷下モ千京	ホ248
		ホ5	9	西善地下モ谷	ホ102	22	休谷要害裾	ホ247-1
2	休谷宅ノ上	ホ241-1	10	ヨシ廻り	ホ68			ホ247-2
		ホ241-2	11	藪廻り	ホ78			ホ247-3
		ホ241-3	12	ウシロ道	ホ79			ホ247-4
3	休谷下屋敷	ホ70続1	13	真谷入口	ホ76			ホ247-5
		ホ245			ホ77			ホ247-6
		ホ245-1	14	真 谷	ホ76続1			ホ247-7
		ホ245-2	15	ウシロ道	ホ80			ホ247-8
		ホ245-3	16	大満寺	ホ83-1			ホ247-9
4	焰硝蔵廻り	ホ72			ホ83-2	23	休谷八幡社跡	ホ246
		ホ73	17	俊 二	ホ445			ホ246-1
		ホ442	18	上ミ千京	ホ85			ホ246-2

表2 山吹城の地名一覧表

山吹城の縄張りについては、要害山頂上部分には大規模な郭が階段状に南北に配置され、主郭の南側に大規模な空堀がみられる。城の南斜面には合計18本の豎堀が築かれ、北側の郭には一部石垣が構築されている。大手の部分は戦国時代の休役所跡に大規模な石垣があり、大手門跡を挟んで東側には焰硝蔵跡の石垣が存在する。

調査を実施した下屋敷地区は、広く地名の「下屋敷」がのこる地域で、戦国時代には武家屋敷が存在したと予想されるところである。現在のこる字限図によれば休役所跡の北側と南に「下屋敷」の地名があり、隣接する南には「大満寺」がある。西側の小規模な谷の入口に「休谷八幡社」があり、この南側に「千京」「上千京」が広がる。地名としては現存していないが、休役所付近には銀を納めたという「御文庫」があり、既に廃寺となった龍昌寺も城内にあったものだという。文献資料によれば、山吹城の初見資料は『銀山旧記』などに天文11年（1542）とみえる。その後『石見吉川家文書』等によれば、毛利氏支配下において「休役所」が史料上あらわれ、銀山支配の拠点として山吹城下に役所が置かれたことが窺える。この下屋敷地区の南には地名としての「魚店」「上市場」などの地名があり、城下の店や市の存在が予想されるところである。

2. 調査の概要

第1トレンチ

第1トレンチは休役所の石垣の北側、旧水田が広がる場所に設定した。現況は水田が階段状に並び、戦国時代から江戸時代の地割の影響を受けていると予想される場所であった。第1トレンチは段差のある二つの水田の畦畔がトレンチのほぼ中央に位置するように設定し、水田の段差がかつての遺構を反映しているのか、また遺構が遺存しているかどうかを確認することを主眼とし調査を実施した。

調査の結果、層序は上から旧耕作土である暗褐色土、淡褐色砂礫、淡茶褐色砂質土、暗灰色粘質土となる。2層の淡褐色砂礫層は、大形の礫を多量に含み

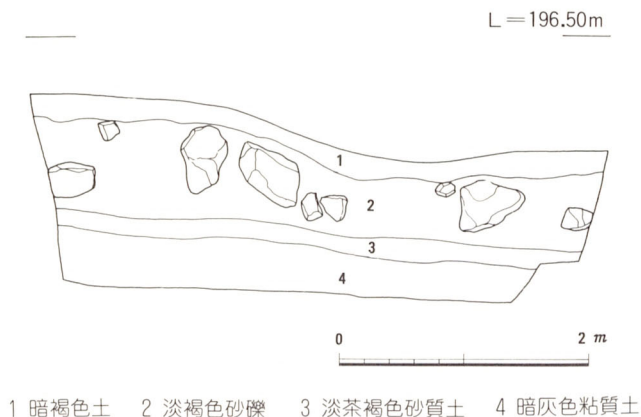


図4 第1トレンチ東壁土層図（1/60）

粒子が微小で粘性があり、この層は厚さ約40~80cmにもなる。3層の淡茶褐色砂質土層は小形の礫を多量に含む、粒子の細かい砂層がレンズ状に含まれている。2層と3層はいづれも水の流れの中での堆積と考えられる。4層は礫を含み、粒子が微小で粘性の強い粘質土で、サブトレンチ内で確認したが更に40cm以上も深くなる。

2層と3層については、多量の礫を包含し砂層がレンズ状にはいるなどの特徴から、昭和18年の大水害の土石流と考えられる。4層が昭和18年以前の表土、あるいは耕作土になり、下層には遺構が遺存している可能性がある。

遺物は4層から備前焼の壺の底部の破片が1点出土している。

第2トレンチ

第2トレンチは休役所跡の現在のこる石垣の北側に設定し、石垣の構築状況と役所跡の遺構の存否の確認を調査の主眼とした。調査の結果、遺構として礎石と石列を検出、また石垣の構築状況を一部確認した。

層序は上から、暗褐色土、茶褐色土、明茶褐色粘質土となり、石垣近くで暗灰褐色土がはいる。このうち4層の明茶褐色粘質土は、粒子微小で粘性がある地山粘質土が整地され遺構面となる。検出した遺構は、この明茶褐色粘質土の上面に礎石・石列が置

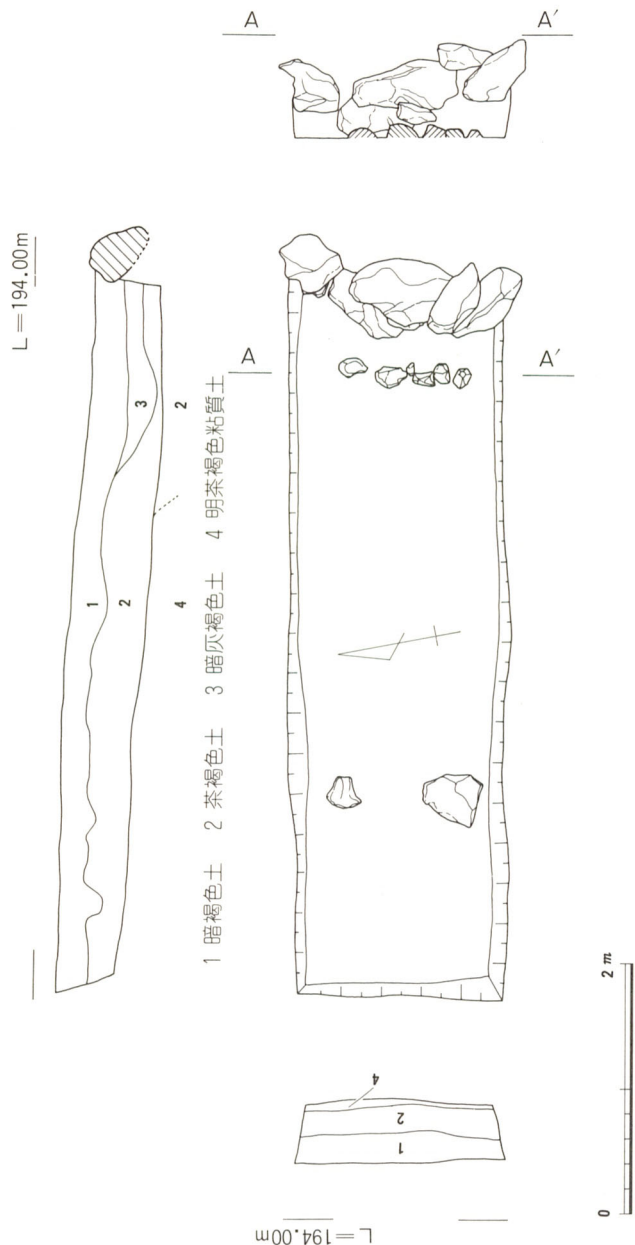


図5 第2トレンチ遺構および土層実測図(1/60)

かれ、礎石は石垣から約3.4m北で検出している。この礎石は凝灰岩系の切石と考えられるもので、大きいものは約40cm、小さいものは約20cmのものである。石列は約10~20cmの自然礫が石垣から北約30cm前後の位置に石垣と並行して東西方向に築成されている。

検出した遺構と石垣の上面のレベル差については、石垣の上部については後世に畑などを造成する際に築成されたか、あるいは石垣に沿って築かれた土塁等の施設のためにレベル差が生じたと考えられる。可能性としては石垣の積み方が堅固でないところから、後世に積まれたと考えるほうが妥当である。

出土遺物としては遺構面と茶褐色土層から陶磁器、釘などの鉄製品が出土している。図6はいずれも遺構面から遺物である。1は染付皿で、時期は16世紀第4四半期のものである。2は唐津碗、3は唐津徳利の底部、時期は2・3とも17世紀前半のものである。

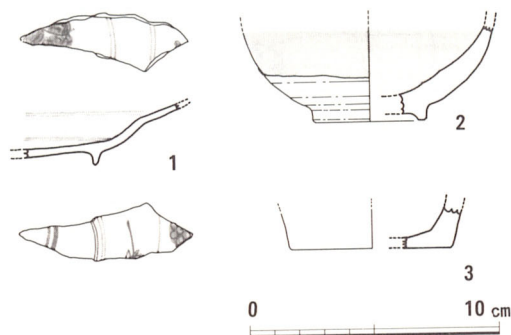


図6 第2トレンチ出土陶磁器実測図(1/3)

第3トレンチ

第3トレンチは休役所跡の南側、舌状に整地された平坦地に設定した。この平坦地は第2トレンチを設定した休役所跡の平坦地よりも約7m低く、焰硝蔵跡の方形の平坦地とともに樹形虎口の一角を形成している平坦地である。この舌状平坦地の東斜面と焰硝蔵跡の間は現在谷川になっているが、かつては大手門に至る道の跡と考えられている。このトレンチは平坦地の東斜面に一部かかるように設定している。

調査の結果、トレンチの西側で石積みの遺構を検出している。この石積みは検出した範囲で凝灰岩系の自然石を積んだ3段、60cm以上にもなるもので、石垣になる可能性もある。層序は石積みの部分で、上から黒褐色土、暗褐色砂礫、明茶褐色土、灰白色土となる。2層の暗褐色砂礫は大形の礫を多量に含み、昭和18年の水害で堆積したと考えられる層、3層の明茶褐色砂礫は砂粒を多く含み粘性がある層、10層の灰色土は礫を多く含み地山と考えられる層である。この層の上面の礫は平坦に切られた痕跡があり、地山面を平坦に加工したと考えられる。石積みが築かれたレベル以下については、暗茶褐色土、暗褐色土、暗茶褐色土、明茶色砂質粘土となる。石垣周辺は固く締まった暗褐色砂礫が堆積しており、明橙色粘土ブロックを包含している。トレンチの東側の斜面部分は当初石垣の存在なども予想された箇所であるが、調査の結果、表土の下は地山となっており石垣等の施設は存在しなかったが、地山が加工された可能性がある。

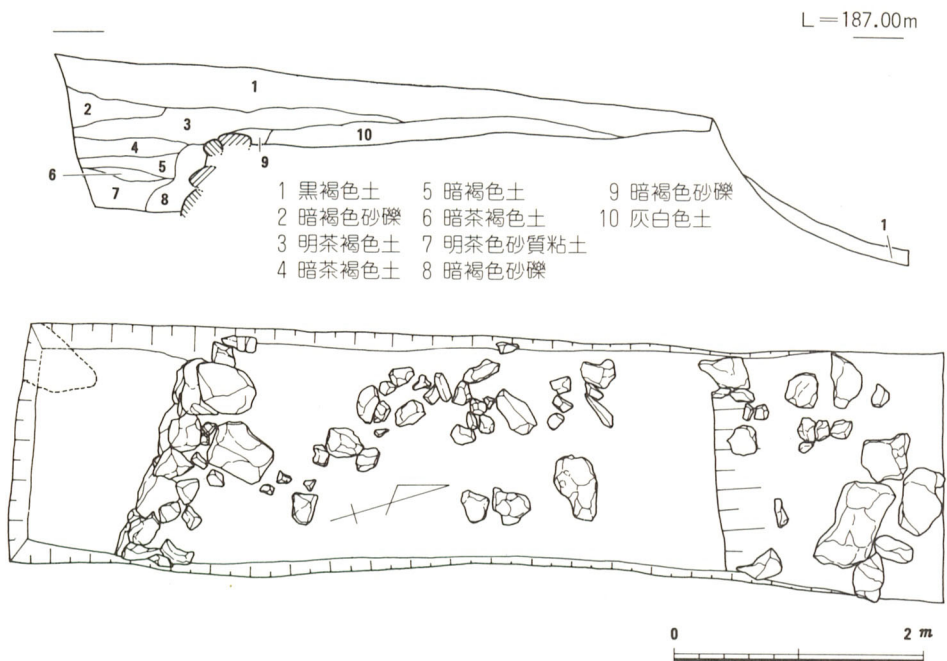


図7 第3トレンチ遺構および土層実測図 (1/60)

第3トレンチから出土した遺物としては、陶磁器が若干出土している。図8は西側の落ち込み内から出土した陶磁器である。1は志野の絵皿、2は絵唐津の大皿、3は小形の壺の口縁で産地は不明である。1・2の時期については17世紀前半のものである。

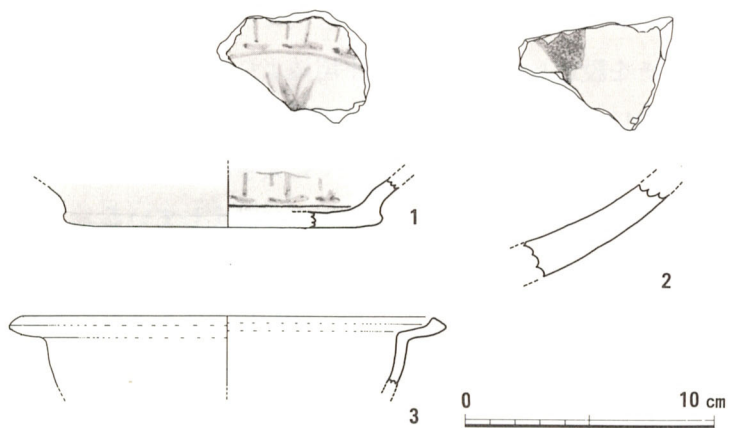


図8 第3トレンチ出土陶磁器実測図 (1/3)

第4トレンチ

第4トレンチは焰硝蔵跡南の旧水田に、大手門に至る部分の遺構の確認のために設定した。調査の結果、明確な遺構は確認しなかったが、トレンチ内で礫を含む固く締まる部分と、礫を含まないやわらかい部分があり、固く締まる部分が道になる可能性がある。

層序を観察すると、上から暗褐色土、明茶褐色土となり、暗灰褐色土、暗灰色粘質土が部分的に入る。その下は道の可能性のある黒灰色砂礫と茶褐色粘質土となる。2層は砂粒を多く含んでいることから、昭和18年の

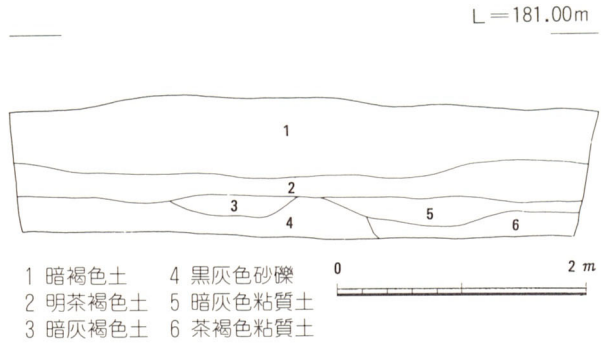


図9 第4トレンチ北壁土層実測図 (1/60)

4層の黒褐色砂礫は比較的大きな礫を含み固く締まることから人工的に整地され、道の痕跡の可能性はある。サブトレンチ内ではあるが、6層の下は整地のためと思われるカラミが堆積している。出土遺物としては若干の陶磁器がある。

第5トレンチ

第5トレンチは地名として「下屋敷」がのこり、現在の山吹城登山口から近い旧水田に

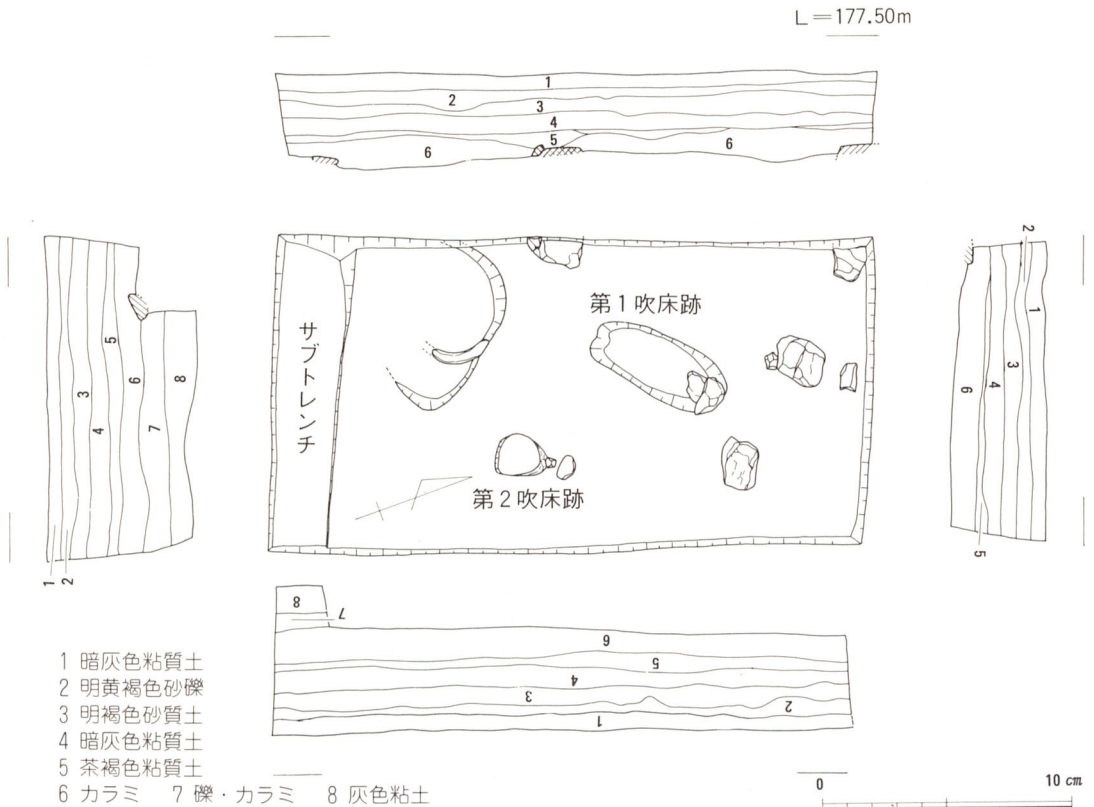


図10 第5トレンチ遺構・土層実測図 (1/60)

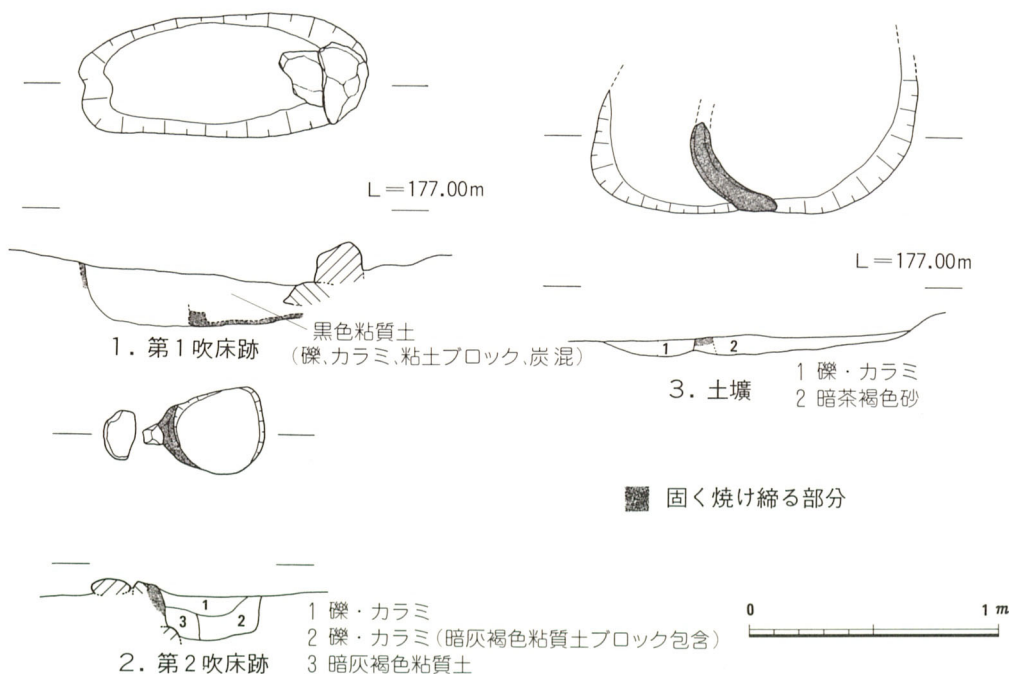


図11 第5トレンチ吹床跡・土壌実測図(1/60)

トレンチを設定した。かつての下屋敷の遺構の確認を調査の主眼として実施した。調査の結果、建物跡の遺構の一部と、銀精錬に関連すると思われる吹床跡を検出した。

層序は比較的単純で、上から旧耕作土である暗灰色粘質土、明黄褐色砂質土、明褐色砂質土、暗灰色粘質土、茶褐色粘質土、カラミとなる。2層は大きいもので拳大になる礫を含み旧水田の床土になると考えられる土層である。3層は砂粒の堆積が顕著に認められるもので、昭和18年の水害時の土石流の堆積と考えられる。4層の暗灰色粘質土は粒子微小で粘性があり、昭和18年以前の旧耕作土と考えられる。5層の茶褐色粘質土は粒子が微小でカラミを多量に包含しており全体に固く締まっている。6層はカラミの単一層で、かなりの量のカラミが堆積している。カラミの様態は全体に黒く、塊が大きいという特徴がある。これまでの調査から銅を含む永久鋳床の鋳石が精錬された際に排出されたカラミと考えられるものである。カラミの下は建物跡の床面は黄褐色から灰褐色粘質土のたたきで、熱を受けているところが茶褐色に熱変化している。

検出した遺構は、建物の礎石と精錬施設である吹床跡がある。礎石はトレンチ内で南北方向のものと東西方向のものがある。南北方向のものは3ヶ所礎石を検出しており、礎石間距離は約100cm前後(半間、1間が6尺5寸=196.95cm)、東西方向のものは1ヶ所礎石を検出し、礎石間距離は約200cm前後、ほぼ1間となっている。南北方向の礎石近くで

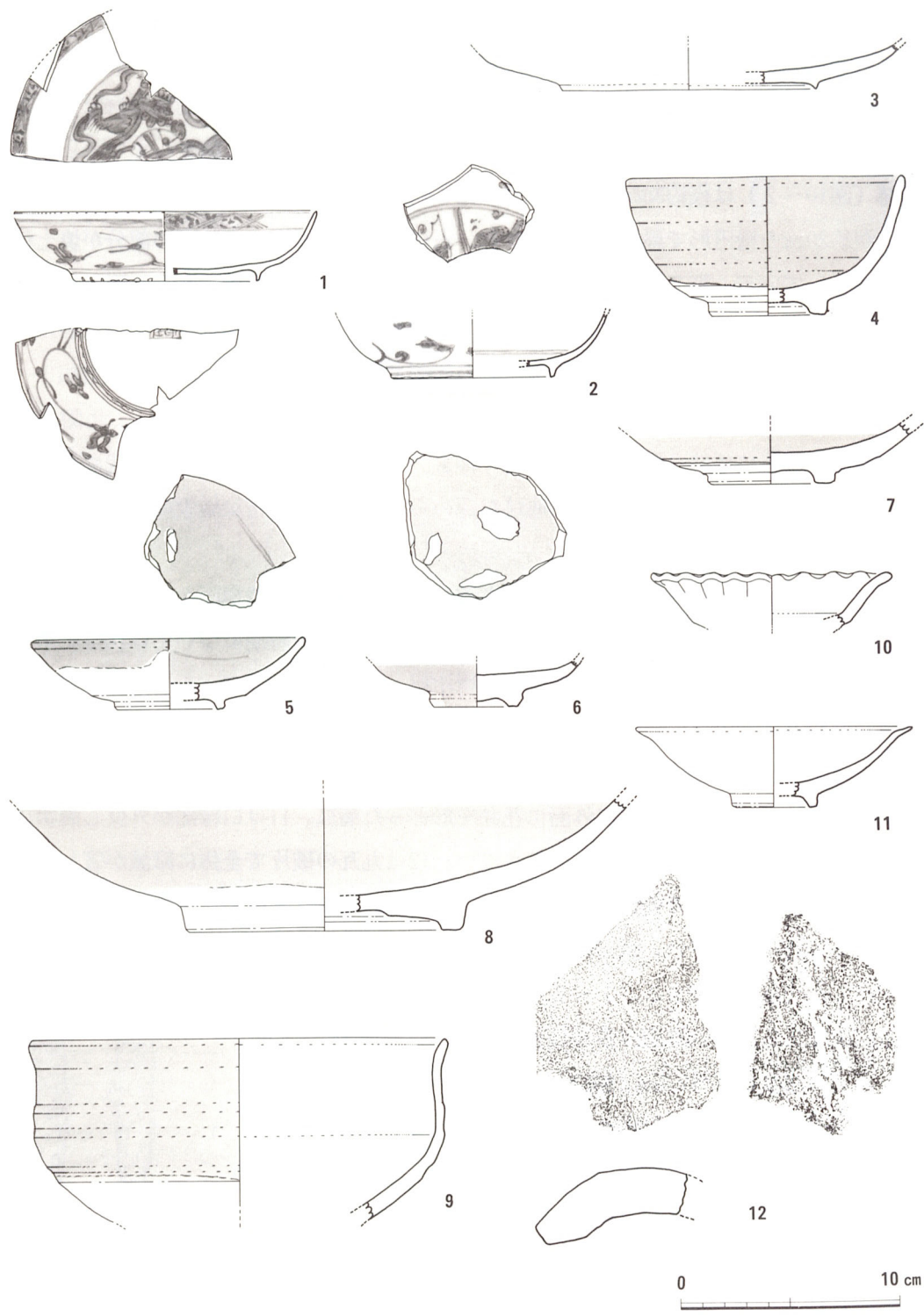


図12 第5トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

検出した第1吹床跡(図10-1)は楕円形の掘り方で、長径が約130cm、短径が約50cm、深さ約20cmである。東側に接して長辺が約30cm、短辺が約20cmの方形の礫が埋設されている。吹床内の土層は黒色粘質土で、礫・カラミ・粘土ブロック・炭化物を包含している。掘り方の西側の肩の部分と底面の東側半分は厚さ約1~2cmで固く締まっている。第2吹床跡(図10-2)は径約35cmの掘り方で、深さ約20cmである。この掘り方の東側に接して長径が約20cmの楕円形で扁平な石が置かれ、石に近い部分の掘り方の肩の部分焼土化し固く締まっている。第2吹床内の土層は1層が黒色で固く締まる礫・カラミ層、2層が暗灰褐色粘質土をブロック状に含む礫・カラミ層である。吹床の底面については1層の下面が底面になる可能性がある。第1・2吹床の西側で楕円形の深さ約15cmの土壌(図10-3)を検出している。この土壌は長径が約120cmで、南側が礫・カラミが堆積し、北側の暗茶褐色砂層との境には熱を受けて黒色に固く締まった部分が約40cmの長さで弧状に遺存している。この土壌の底面も熱を受けた痕跡が認められ、何らかの精錬施設の遺構の可能性はある。

出土した遺物には陶磁器・金属製品がある。図12はいずれも遺構面から出土した陶磁器と瓦である。1・2は染付皿、3は白磁皿である。1・2の時期については16世紀第3四半期のものである。4は唐津碗、5~8は唐津皿、9は唐津片口で、5は内面の口縁近くに草花文がある絵唐津の皿で、内面に胎土目積みの痕跡がある。6は内面に砂目積み痕跡が3ヶ所あり、二次焼成を受けている。4~9の時期については17世紀前半である。10・11は瀬戸美濃系の皿で、10は内外面に花卉を形どった菊皿、11は口縁部が外反し溝状になるもので、二次焼成を受け釉薬をのこさない。12は丸瓦の破片で全体に摩滅が著しい。図12は遺構面から出土した陶磁器の概要は、小片が多いが染付、唐津などの小片が多く出土しており、量としては唐津系が多い。図13は遺構面から出土した金属製品である。1・2は鑿、3は分銅である。1は断面が扁平なタイプで、現存の法量は長さ7.4cm、幅1.5~1.7cm、厚み0.6cmを測る。2は断面が方形になるタイプで、現存長7.4cmを測るものである。いずれも小形であることから採鉱に使用する鑿ではなく、製錬の過程で使用された鑿と考えられる。3は全長2.1cmを測る分銅で、重量は14gである。分銅の中でも小型

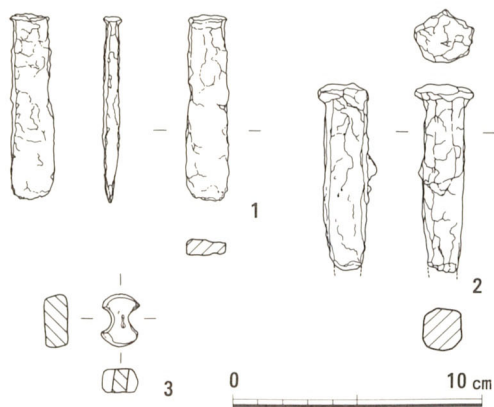


図13 第5トレンチ出土金属製品実測図(1/3)

のものである。

第6トレンチ

第6トレンチは第2トレンチの東側、かつて大手門が存在したと考えられる一段低い平坦地とそれに続く旧水田跡にまたがるように設置した。調査は大手門の遺構の確認を主眼として実施した。

調査の結果、第1トレンチと同様に昭和18年の水害時の土石流の堆積と思われる層がかなりの厚さで確認された。層序は1層が旧水田の耕作土、2層が旧水田の基盤層である淡茶色粘質土、3層が土石流と考えられる大形の礫を多量に含む淡褐色砂礫、4層が粒子が微小で粘性の強い淡茶褐色粘質土である。このうち4層は均一な層で整地層になる可能性がある。北壁土層の観察によれば、この4層は西側に向かって傾斜している様子が確認されることから、大手の道等の遺構を反映している可能性がある。遺物は出土していない。

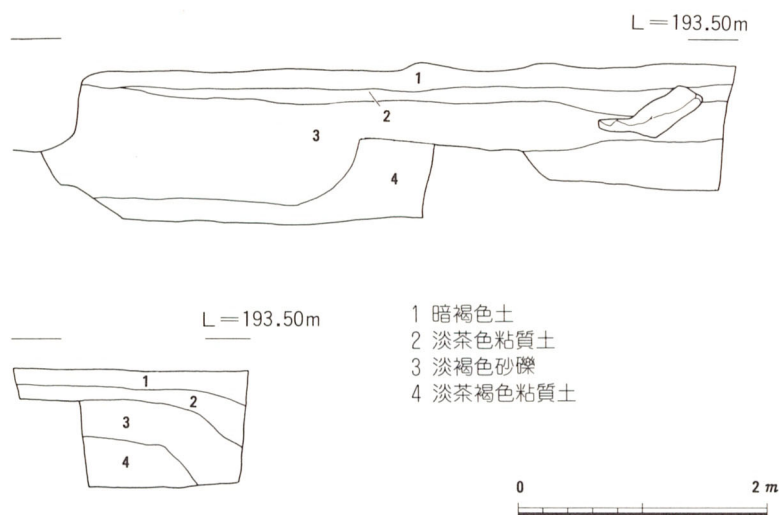


図14 第6トレンチ北壁土層実測図 (1/60)

IV 小 結

1. 山吹城跡下屋敷地区の歴史的景観の復原について

(1) 戦国時代の城下について

山吹城の頂上部分の築城の変遷とともに城下の役所跡、武家屋敷等について詳細がわかる文献資料、絵図等の資料は存在しないが、今回おこなった試掘調査の結果と字限図による現地踏査により歴史地理学的方法で戦国時代の歴史的景観の復原を試みたい。『石見吉川家文書』等に見える「休役所」は限図等により、現在のこる長さ約10mの長大な石垣とその西側に広がる平坦地と考えられ、現在は石垣の南側が道によって壊されているが、道の路面内に礎石の一部と考えられる巨大な石が露出しており、本来は要害山の裾までこの石垣は連続していたものと考えられる。また北側は大手門跡と考えられる一段低い平坦地までこの石垣は存在していたと推測されるが、昭和18年の水害時の土石流によってその半分以上が崩壊したと思われる。

いわゆる柵形は不整形の方形で、東側の斜面に石垣が2列で確認されている。平坦地はほぼ中央に高さ約1m、長さ約11mの石垣が存在し、石垣がのこる北側の平坦地が一段高くなる。この柵形は地名が「焰硝蔵」であり、戦国期には焰硝蔵（火薬庫）か櫓の建物が存在し、大手の防御の拠点であったと考えられる。柵形の南側に広がる舌状の平坦地は、第3トレンチの調査の結果、地山を削って整形された可能性が強く、また調査により平坦地のほぼ中央、東西方向に石垣が築かれており、単なる平坦地ではなく石垣を伴う遺構が存在することが判明した。

大手の登城ルートについては、第4トレンチで確認したが柵形の東側に道の痕跡らしい遺構面が存在することや柵形の位置等から、大手門に至るルートは北側の丘陵裾を走り、柵形で南に折れ、舌状の平坦地にぶつかり西に折れ、休役所の石垣で北に折れ、大手門に至ると考えたい。大手門から山吹城頂上に至るル



図15 戦国期の大手の復原 (1/3,000)

トについては、西に位置する小規模な谷の入口に「休谷八幡社」の地名があり、この前を通り頂上に至ると思われる。^{註1)} ここから頂上に至る登城ルートについては、今後分布調査を進め、詳細な検討をする必要がある。

(2) 大久保長安の支配について

大久保長安は慶長6年(1601)奉行となり石見銀山の支配と経営を始めるが、長安が奉行所を置いたのが、戦国時代の休役所である。佐渡相川の奉行所跡が示すようにかなり広い範囲で奉行所を構築したと考えられ、西側が一段高く平坦地が広がることから、ここまでが奉行所の範囲と推定される。休役所の南側が道により切られているが、これは長安の奉行着任以降で、柑子谷(永久坑道など)の管理のために新設された道として設置されたと考えられる。大久保長安の支配にはいり、戦国時代の大手と比較して大きく改変されたと考えられるのは奉行所の東に広がる平坦地に銀製錬関係の諸施設が置かれたことであろう。第5トレンチで検出した遺構と出土した遺物は、遺物の年代から17世紀初頭で、長安が経営した吹屋と考えられるものである。またこのトレンチの周辺から広い範囲でカラミが表採できることから、かつての大手の部分に長安の時代には吹屋などの銀製錬諸施設が集中していたと予想される。慶長9年(1614)の「大久保長安書状」(吉岡家文書20)によれば「其元五吹屋並諸間歩諸口屋被入精由まんそく申候事」^{註2)}とあり、長安が5ヶ所の吹屋を経営したことが窺え、下屋敷地区で検出した吹屋跡の一部は、この5ヶ所のうちの1ヶ所にあたると思われる。

地名としてのこの「千京」「下千京」あたり一帯は、佐渡相川町の町立てにみられるように、大久保長安の奉行時代につくられた商人町と推測される。また銀を納めたといわれる「御文庫」もこの下屋敷地区内に位置していたと考えられる。

2. 第5トレンチの遺構・遺物について

第5トレンチで検出した遺構のうち第1・2吹床跡について若干の考察をおこないたい。全国の鉱山遺跡の中で吹床跡(例えば灰吹床、南蛮床、小吹床など)として、遺構が明確なかたちで検出された事例は少ない。代表的な例として、兵庫県の石垣山遺跡から灰吹床・南蛮床と考えられる吹床跡が検出されている。また大阪の住友家が経営した長堀銅吹所跡からは、数多くの製錬施設が検出されているが、その中に灰吹床、南蛮床と推定されているものがある。それぞれ吹床の規模については差異が認められるが、共通しているのは、

吹床の築成状況で、粘土質の土で築かれ平面は円形で断面はすりばち状である。検出された状況は、断面の観察によればかなりの部分が焼土化しており、吹床内の土層は灰を多量に含むものが多い。^③ もちろん操業された時期の問題はあるものの、石見銀山遺跡の吹床を対比して考えることができる。

第5トレンチで検出された吹床跡と考えられる遺構については、出土しているカラミの量が多量であり、様態が黒色であることから銅を含む永久鋳床の鋳石が製錬されたと考えられ、精錬過程の中で南蛮絞りの作業がおこなわれたことになる。永久鋳床の鋳石の精錬の場合には、福石鋳床と違い精錬過程が複雑化すると理解されており、今回検出した遺構については、吹床の性格について明確に断定はできない。第1吹床と第2吹床は検出した範囲で位置も近いことから、同時に操業したとは考えにくく、規模が違うことから性格を異にする吹床と考えられる。第1吹床内の東側で礫を検出しているが、第2吹床では東側に接して扁平な礫を検出している。吹床の内と外という違いはあるが、吹子の羽口が置かれた位置と考えられ、礫がある側の壁がよく焼け締まっている。

文政12年（1829）に記録された『銀山吹方覚』^④によれば、たとえば灰吹床について「灰吹床さしわたし四尺位又三尺位なるもあり」「床の内底五六寸位も小吹床のこつくスパイにて拵る也」とその大きさや構造状の特徴が記されているが、19世紀初頭のすでに製錬技術が確立した時期と、17世紀初頭の最盛期の未成熟な技術（職人的な技術）とは、吹床の構造ひとつをみても差異があって当然であろう。

第5トレンチについては検出した遺構とともに出土した遺物についても注目される。金属製品の鑿・分銅については吹屋で使用された道具と考えられる。坑道内で使用される鑿についてはこれまでの出土資料にいくつかあるが、小形の鑿の出土は初めてである。これらの金属製品と共に出土した陶磁器については、この遺構の年代が大久保長安の奉行在任中、慶長6年（1601）～18年（1619）に営まれた吹屋だとすれば、17世紀初頭段階の遺構に共伴する陶磁器の指標となる。トレンチ調査の限界はあるものの、組成についても検討する余地をのこしている。

今年度実施した山吹城跡下屋敷地区の調査はトレンチ調査であったが、多くの資料と情報を提供することとなった。石見銀山の争奪戦や支配を考える上で貴重な遺跡が集中している地域であり、崩壊している休役所や焰硝蔵の石垣の復原整備なども含め、将来の下屋敷地区全体の発掘調査や整備事業の導入を検討する必要があると考えられる。

- 註 (1) 調査指導会での田中圭一氏、萩原三雄氏のご教示によるところが大きい。
- (2) 『江戸幕府石見銀山史料』所収、雄山閣、1978年
- (3) 兵庫県石垣山遺跡については、『播磨産銅史の研究』(妙見山麓遺跡調査会1978年)、大阪府長堀銅吹所については、鈴木秀典「大阪府大阪市住友銅吹所跡」(『日本考古学年報43』、1992年)等に詳しい。
- (4) 『日本鋳業史料集第五期近世篇』所収、白亜書房、1984年

石見銀山遺跡山吹城の縄張について

寺 井 毅

はじめに

全国各地に南北朝期の遺跡として千早城等、有名な城郭が数多く残るがそのほとんどは後の時代に改修されており、創築時のものではない。それは軍事、経済上の重要地点は、いつの時代にも繰り返し使用され、その時代の持ち主（支配者）の経済力、戦略の変化に応じて改修が繰り返されてきたためである。この改修による築城技術の発展過程は堀のほりかた、防御された郭の出口である虎口（こぐち）、石垣の築き方等によって捉えることができる。そして周辺の城郭や、在城したとされる豪族の動向及び城郭などを調査することによって、改修者とその時代の割り出しが可能とされたのである。本稿は、以上の事項を念頭に、現在見る山吹城の改修者とその時期について考察を試むことを目的とする。

1. 山吹城の遺構

山吹城は大田市大森町に所在する山城である。周辺には銀の坑道が多く存在したため戦国期には争奪的となり、大内、小笠原、尼子、毛利との間で激しい争奪戦が行われた。

主郭はおおむね長方形に築かれ、城内最大の面積を持つ。（図1）北西が張り出し、櫓台が築かれている。この櫓台の脇には坂虎口aが取りついており、主郭北東の張り出しとともにこの虎口を守る構造になっている。主郭の南側には空堀が築かれており、主郭側に橋を架けたような痕跡が残る。郭2は主郭の北側に築かれた郭で、北側と東側に虎口を設けている。北側の虎口bには石垣が築かれているが、石垣はこの周辺しか築かれていないため、櫓門等特別な建造物が建っていたものと考えられる。東側の虎口cは主郭東側のルートに接して設けられており、主郭南側の郭群との連絡のために設けられたものである。このように主郭を経ることなく連絡がとれる構造は比較的新しい発想とされるものである。主郭と郭2のような関係にある場合、郭の端の接点はどうしても防御が手薄になる場合が多い。これを解消するため、接点に位置する場所に土塁を築くことによって防御を強化する技法がある。郭2西側の土塁がその好例で、山吹城にはこのタイプの土塁が随所に見られる。

郭3は郭2の北側に築かれており、主郭に次ぐ面積を持つ。虎口は2ヶ所設けられているが、虎口dは「内柵形」になっており、郭2側の壁に石垣が築かれていた痕跡が認められることができるため、ここが正門の可能性が高い。虎口eを出ると郭4の東端をかすめる形で城外に出る構造になっている。郭4は西寄りに段差が存在するが、一つの郭として機能していたものであろう。郭5、6は後世の改修時には放棄されたものと見え、削平が不十分で郭6などは緩斜面になっている。

郭7は主郭の南側に堀を隔てて築かれており、北西は土塁状に北へ張り出し、空堀の構造を特異なものとしている。空堀は郭7の東端を土端状に削り残すような構造になっている。ここに築かれている郭7-2は郭7より一段高くなっており、一部の研究者から「馬出」とする説が出ているが、主郭へのルートが確認できないことや、南側で郭7の虎口fからのルート、郭2からのルート、そして南側からのルートが集中するため、郭7-2は櫓台ではないかと考える。郭8は西と東側に土塁が築かれている正方形の郭だが、ここで面白いのは、ルートがこの郭を半周するように設置されていることである。又、郭8は郭9よりも上位の存在になっている点、興味深いものがある。郭10の南側には畝状堅堀群が築かれており、山吹城の特色の一つとなっている。

郭は山頂以外にも各所にみとめられ、全山を城郭として使用していた。

以上、山吹城の縄張について説明してきたので、次項では改修時期を考察するにあたって重要な資料となる畝状堅堀群、主郭南側の空堀、そしてルートの設け方について各項単位に考えてみたい。

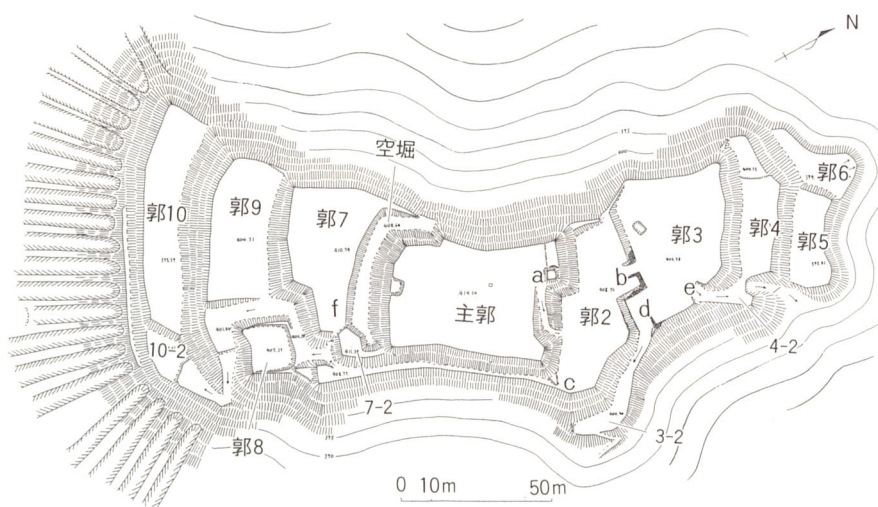


図1 山吹城 (平成元年12月2日調査、寺井毅作図
山吹城平面図(1/500)をもとに作図)

2. 畝状堅堀群について

畝状堅堀群とは堅堀が連続して築かれており、畑の畝のように見えるため付けられたものである。全国各地で報告されており、山腹の水平移動を防ぐためのものとして郭とセットで使用され、最終的には緩斜面や放置すると攻城側の橋頭堡になる恐れのある場所を潰すために持ちいられたものと考えられている。石見では吉見氏の津和野城、益田氏の七尾城、三隅氏の高城、周布氏の鳶巣城、小笠原氏の温湯城等、有力豪族の居城に用いられているが、出雲の豪族の居城では本城氏の高櫓城、大西氏の高麻城しか確認できない。ここで面白いのは、吉見氏は陶氏と籠城戦を行い、益田、周布氏、三隅氏、小笠原氏は毛利氏と戦っていることである。さらに事例を全国に求めると、畝状堅堀群の使用が際だっているとされる出羽の小野寺氏、越前の朝倉氏、築後の秋月氏等はそれぞれ実力的に上位とされる最上氏、織田氏、大友ならびに豊臣政権という領域権力との対決を経験していることである（註1）。したがって山吹城の畝状堅堀群は実力的に上位の勢力、しかも南側にしか築かれていないことから、南側から押し寄せる勢力に備えて築かれたものと見るべきであろう。又、畝状堅堀群は主郭南側の堀等と比較すると、風化が激しいため、ある時期から放棄されたものと考えられる。

3. 主郭南側の空堀

この堀は尾根を堀切るタイプの堀がほとんどの割合をしめる県下において、郭を形成するタイプのものとして高く評価される。県下では石丸城（三刀屋町）、鎗腰城（桜江町）、県外では鳥取県の尾高城（米子市）、手間要害山（会見町）、そして山口県の岩国城に認めることができる。岩国城（図2）は富田城（広瀬町）に在城していた吉川広家が慶長8年に築いた近世城郭であり、他はいずれも毛利氏に重視され

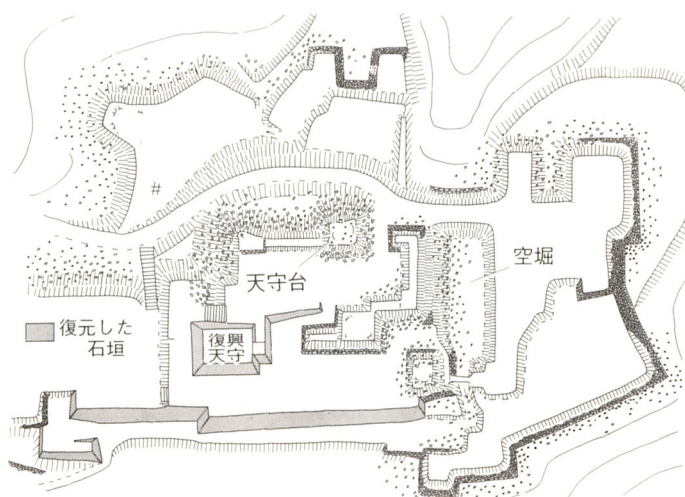


図2 岩国城略図

ていたことから、この堀も毛利氏によって改修されたものと見るべきであろう。

堀の片方を土橋状に堀り残す技法は石丸城等と同じだが、山吹城のものは西端で北にクランクし、さらに西にクランクしており、他より（岩国城を除く）新しい時期のものである。

4. 巧妙なルート設定

山陰の城郭はルートの設定が曖昧なものが多いが、山吹城のものは明確かつ巧妙に設定されている。

○ ルートは3通り確認できるので個々に見てみたい。

郭3-2に取りついたルートは郭2からの横矢を受けながらdの柵形虎口に導かれる。dでは郭2、虎口bの櫓台、そして郭3からの反撃を受けることになる。ここを突破すると虎口bの櫓台を半周するかたちで虎口bに導かれる。そしてここを突破すると虎口a脇の櫓台が正面に築かれているため、ここから狙い討ちにあう構造になっている。

郭5、4の東側をかすめる形で設けられたルートは郭5、4からの横矢と郭3からの反撃を受けながら虎口eに導かれる。そしてここでも虎口eを突破すると虎口bの櫓台が正面に位置しているのである。このように櫓台の周囲を回したり、虎口に入ると正面に櫓台が築かれているのがこの方面の特徴である。

郭10の南側を通り、郭10-2に取りついたルートは郭8を半周する形で設けられている。

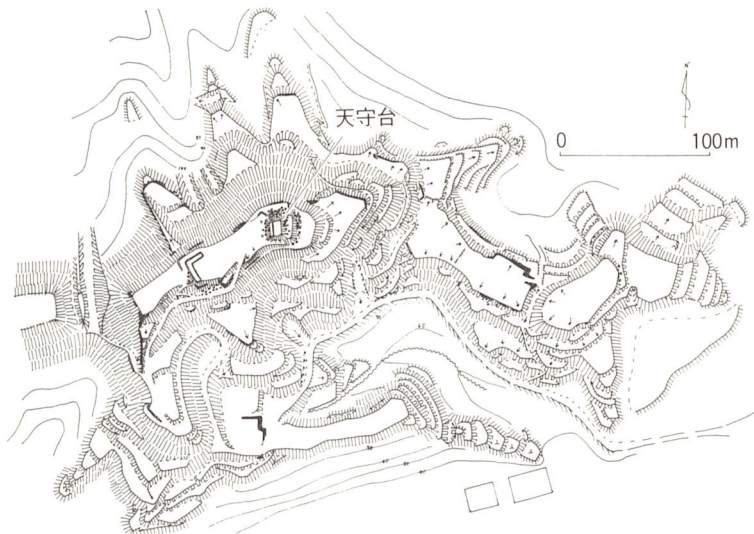


図3 長峰城（飯石郡三刀屋町、昭和62年5月2日
同4日、平成2年8月19日調査）

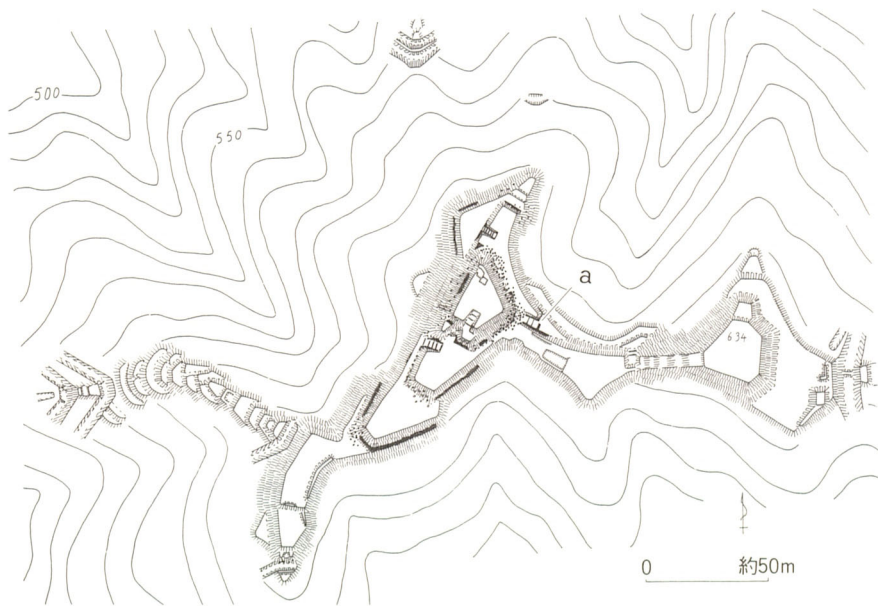


図4 瀬戸山(衣掛)城 (飯石郡赤来町下赤名字上市
平成5年4月29日調査)

郭8はこの方面の守る側の橋頭堡であり、一種の馬出である。馬出には出撃の拠点としてルート上に設けられるもの(武田氏や後北条氏の城郭に多く見られる)とルートの脇に防御の拠点として設けられるパターンとがある(織田系の城郭に見ることが多い)が山吹城のものは後者である(註2)。郭8を半周する間に郭9、郭8そして郭7からの猛烈な反撃を受け、攻城側は甚大な被害を被ることになる。そして郭7-2の櫓台の下に導かれると、ルートは右と左に別れる。右に向かえば主郭東側からまともに横矢を受け、追い落とされる事態に陥る。左に進み、郭7に進入した攻城側は、空堀と主郭からの反撃に合い、ゆくてを阻まれたことになる。平時にはここに橋が設けられていたものと考えられるが、当然戦闘時には焼き払われていたものであろう。郭7側には主郭からの攻撃を遮るものがないため、やむをえず空堀に降り、主郭に取りつくか、当然猛烈な反撃にあうことになる。したがってとりあえず空堀沿いに西側に進むが、ここで空堀は北に折れる構造になっている。ここを曲がると主郭には折り(横矢を討つための射撃場)が築かれており、攻城側はここから反撃を受けることになる。こうなると、犠牲を覚悟で主郭に取りつくか、西側に開かれている空間から空堀に飛び込むしかない。実に巧妙に仕組まれた縄張りである。このように虎口と櫓台を巧妙に配置した縄張りの城郭は、県下には幕末まで存続した松江、浜田、津和野を除くと富田月山城と三刀屋城、瀬戸山城しか確認されていない。富田月山城は、尼子氏の居城として知られるが、現在残る遺構のうち山頂及び山中御殿と伝えられ

ている郭は総石垣となっており、明らかに慶長5年に入城した堀尾氏による改修である。
(註3) 菅谷口の柵形虎口脇に築かれている櫓台は尾根筋にも面しており、この方面の防
御の拠点であった。

三刀屋城は飯石郡三刀屋町に所在する城郭で、出雲の中心に位置するため、堀尾氏によっ
て近世城郭として改修された。現在石垣が人為的に壊されているため明確ではないが、主
郭北側の天守台を半周する形で主郭に入る構造になっていたものと考えられる。(図3)

瀬戸山城は飯石郡赤来町赤名に所在する山城で、赤穴氏と毛利氏との激戦の地として知
られる。主郭周辺が総石垣で改修されており、天守台に相当する主郭の周辺に三ヶ所の虎
口が集中し、主郭によってすべての虎口を押さえているのが特徴である。(図4)

又、県下にも柵形虎口を持つ優れた城郭は鷲ヶ巣城、勝山城等存在するが、これらは郭
の先端部に虎口が位置しているため、戦闘に参加する守城側の兵力が限定される危険性を
持つ。守城側の防御力を最大限に発揮するため、郭の周囲をまわすようなルートを設定を
した瀬戸山城の防御思想との差には大きなものがある。

この城郭も人為的に石垣が破壊されているが、aの柵形虎口には平石が敷いてあり、柱
石も良く残り保存状態は良い。おそらく櫓門形式の表門が建っていたものであろう。この
城郭も堀尾氏によって改修されたものと考えられる。

ま と め

これまで山吹城の特徴についてみてきたが、主郭南側の空堀は周辺の防御思想とうまく
噛み合っているため、巧妙なルート設定と同時期に一気に改修されたものと考えられる。
空堀の特徴は毛利氏のものと考えられるため、毛利氏による改修と考えられるが、山吹城
のような巧妙なルートを設定している城郭は、県下の毛利氏の城郭では確認できない。

このように櫓台と虎口の関係を重視する城郭は、堀尾氏等の織豊政権の大名に多く見る
ことができる。織豊政権は傘下の大名に織豊系城郭を指導、強要した。したがって山吹城
は毛利氏が織豊政権と接触した時期に、毛利氏によって改修されてものとみる。

註1 松岡進『中世城郭研究』2巻、P41、1988年

註2 賤ヶ岳の戦いの時に柴田氏によって築かれた玄蕃尾城主郭南側の馬出がその好例

註3 八巻考夫『中世城郭研究』6巻、P119、1992年



休役所跡 石垣



焰硝蔵跡 石垣



第1トレンチ 北壁土層



第1トレンチ 完掘状況



第2トレンチ 遺構検出状況



第2トレンチ 石垣構築状況



第3トレンチ 遺構検出状況



第3トレンチ 石積検出状況



第4トレンチ 遺構検出状況



第4トレンチ 西壁土層



第5トレンチ 遺構検出状況



第5トレンチ 南壁土層



第5トレンチ 第1吹床検出状況



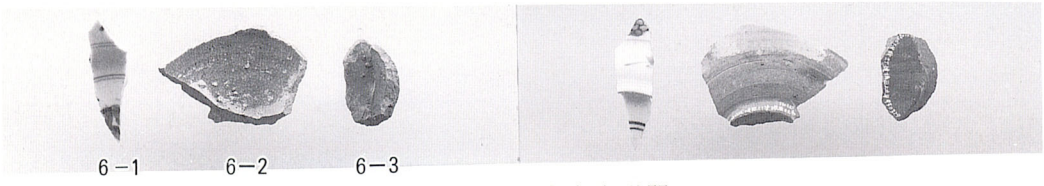
第5トレンチ 第2吹床検出状況



第6トレンチ 完掘状況

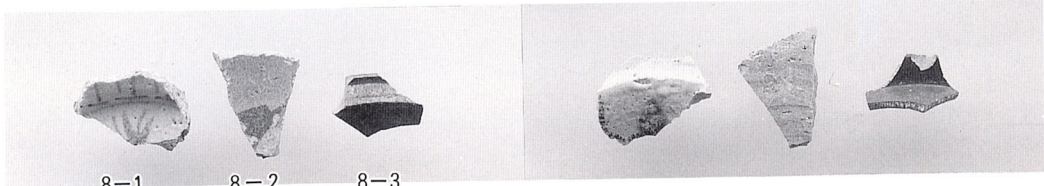


第6トレンチ 西壁土層



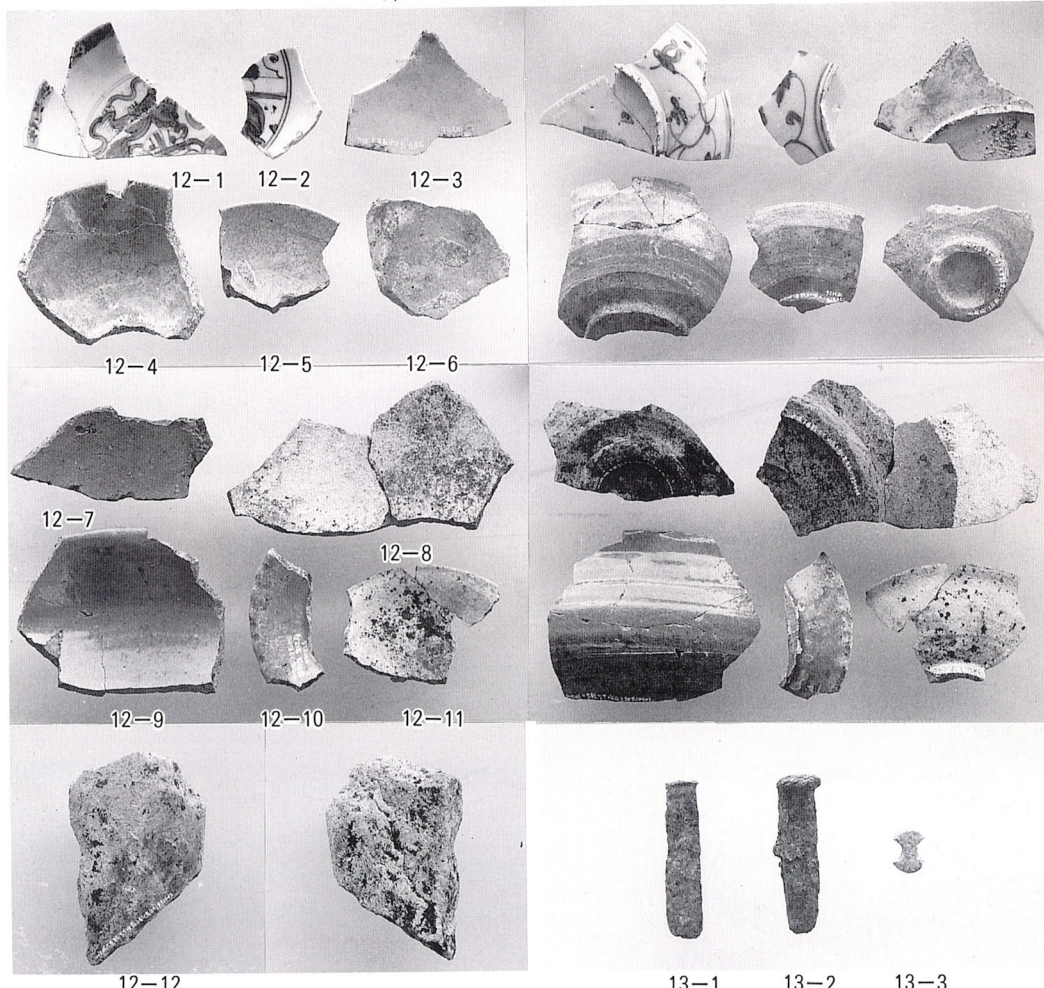
6-1 6-2 6-3

第2トレンチ出土陶磁器



8-1 8-2 8-3

第3トレンチ出土陶磁器



12-1 12-2 12-3 12-4 12-5 12-6 12-7 12-8 12-9 12-10 12-11 12-12 13-1 13-2 13-3

第5トレンチ出土遺物

山吹城下屋敷地区出土遺物

大田市埋蔵文化財調査報告 16

石見銀山遺跡発掘調査概要 6

1993年3月

島根県大田市教育委員会
(島根県大田市大田町大田口1111番地)

